

平成26年度北方領土青少年等現地視察支援事業終了報告（大分県）

北方領土返還要求大分県民会議

1 概況報告

(1) 目的

北方領土返還要求大分県民会議が構成した青少年等現地視察団を北方領土隣接地域に派遣し、青少年等が日本の最北東端の地の生活と、自らの目で北方領土を望見し、元島民の体験談等を聞くなどの機会を提供することにより、北方領土問題を身近に捉え、返還要求運動の継承者を育成することを目的とする。

(2) 実施主体

北方領土返還要求大分県民会議、同教育者会議

(3) 期 日

平成26年07月26日（土）～平成26年07月29日（日）3泊4日

(4) 参加者

①引率者 県民会議代表2名 教育者会議代表2名 大分商業高等学校教諭1名
②青少年 大分商業高等学校生 15名 計 20名

(5) 行程実績

7月26日（土） 大分発 釧路空港着 明郷伊藤牧場 根室市泊
7月27日（日） 別海町洋上視察 四島交流センター（元島民講話等）
7月28日（月） 納沙布岬 北方館・望郷の家 春国岱ネイチャーセンター
7月29日（火） 釧路空港発、大分着

(6) 事業終了後の所感

○引率者

遠い九州の地から離れた北海道の自然、元島民の生の声、納沙布岬での実際の距離感等を子どもたちに直接体験させたことは意義深かった。

○青少年

実際に元島民の話を聞き、現地での距離の近さを実感することで これまでの認識の甘さや、関心の低かった自分や周りの人を今回の研修で少しは変わろう、現実を周りの人に伝えようという気持ちが生まれた。

○視察団代表

若い世代が、直接現地の近くまで行き、元島民の話を聞くなどの経験は得がたいものであった。その結果、今回の貴重な経験を活かし、自分の考え方を考え直し、他の人たちへの啓発活動の必要性も感じてくれていた。

(7) 事業の活用

大分商業高校にて、全員に感想文を記入させた。その感想文を基に、学校の文化祭で意見発表の弁論及び資料展示など生徒企画でを行う予定。

大分県民大会でも、昨年に引き続いて、発表の機会を作りたいと考えている。昨年の県民大会では、多くの参加者がたから高い評価をいただいたので、本年をも継続したいと考えている。

2 視察団代表の感想

本年度は、昨年度に引き続き、大分県立大分商業高等学校の生徒を青少年として選んだ。理由は、昨年度、同校の取り組みがすばらしく、視察で学んだことや自分の思いを大分県の県全体の弁論大会で発表し、入賞した結果大分県代表として九州大会や全国大会にも出場することができた。

さらに、大分県民大会でも、多くの参加者に感銘を与えた。参加した生徒がさらに学習したいという意欲も持つようになったからであり、同校の理解と協力も得られるようになったためである。

募集の段階から、意見文を書かせることで選考し、さらに視察後に取り組む内容もあらかじめ知らせていたが、多くの生徒の募集があった。

事前学習会でも、同校校長も参加していただき、私から1時間の講義を行い、その後、質問等もでて有意義に行うことができた。事前学習については、北対協から資料DVDを送っていただくなど協力に感謝しています。

さて、今回の視察で、生徒はもとより私自身、直接経験することで多くのことを学ばせていただいた。



特に、2日目の四島交流センターでの元島民の得能さんの生々しい体験談。子ども達への熱いメッセージ。島が返還されたら、自分はそこに住みたいという元島民の言葉。領土問題は、島民の問題ではなく、日本人の問題という言葉。それぞれの言葉に、実体験者ならではの言葉が語られ、もっともっと聞きたかったが、時間が短かったのが非常に残念である。

さらに3日目、納沙布岬に初めて立って、この近さはなんだろう。ここに国境を作ることの理不尽さを痛切に感じたところである。

ここに来たこと、この現実をもっともっと多くの人に伝え、感じ、考えてもらいたいと思った。

そこに見えるのに、70年近く帰れない人がいる。今でも漁業などの生活で困っている人がいる。この現実を、多くの日本人はどう考えるのか。

自分自身のこれまでの認識の甘さを再認識させられながら、今後、一層努力していかうと考えさせられた、今回の視察であった。

10年ぶりに、次は島に渡ってみたいとも思った3泊4日の旅であった。

